

目次

クラヴェアートの謎

5

訳者あとがき

241

解説 sugata

248

## 主要登場人物

- ジョン・クラヴァートン……………引退した保険数理士  
クララ・リトルコート……………クラヴァートンの妹。霊媒（マダム・ダイアーネ）  
ヘレン・リトルコート……………クララの娘。ナース  
アイヴァー・ダーンフォード……………クラヴァートンの甥  
フォークナー……………クラヴァートン家の執事  
シドニー・オールドランド……………クラヴァートンの主治医  
ビル・オールドランド……………シドニーの息子  
ミルヴァーリー……………オールドランドの代診医  
ヒュー・ライズリントン……………クラヴァートンの顧問弁護士  
アラード・ファヴァーシヤム……………病理学者  
ミュリエル・アーチャー……………クラヴァートンのかつての秘書  
メアリ・アーチャー……………ミュリエルの娘  
ハンスリット……………スコットランドヤードロンドン警視庁犯罪捜査課警視  
ランスロット・プリーストリー……………数学者  
ハロルド・メリフィールド……………プリーストリーの秘書

クラヴァー  
アートの  
謎

## 第一章

プリーストリー博士が旧友ジョン・クラヴァートン卿を訪ねるのは、ほぼ一年ぶりのこと。アールズ・コート駅で下車し、ボーマリス・プレイスへと歩き出すと、ご無沙汰していたことで気が咎めた。だが、そのあいだ顔をあわせなかったのは、博士だけの罪でもなからう。プリーストリー博士は多忙な人物だ。科学の探究に追われ、社交的な息抜きをする暇はほとんどない。それに、博士にはほかに時間も割くことがあった。博士には趣味があり、そのことはごく限られた者しか知るまいと勝手に思い込んでいたが、いつの間にか手を広げてしまっていた。いつでも事件の捜査に関与して、時には幾週にもわたって精魂を傾けてしまうのだ。

ジョン卿はといえば、余暇を持って余す人物だった。世捨て人のように暮らし、唯一の趣味は書物に囲まれて過ごすこと。とすれば、ウエストボーン・テラスに邸宅を構えるプリーストリー博士を訪ねる機会はいくらでもあっただろう。だが、そこまでする必要もないと思っていたのかもしれない。

実はここ数年、二人はすっかり疎遠になっていた。かつて、プリーストリー博士はイングランド中部地方の大学で教授職にあったが、その頃、二人は親しい友人同士だった。クラヴァートンは同じ町で保険数理士をしていて、この二人の優れた知識人は、互いに共通点が多いのに気づいたのだ。

だが、大戦の一、二年前、プリーストリー博士は教職を辞し、熱意ある学生たちを嘆かせた。大学

当局が同じく嘆いたかどうかはよくわからない。博士と接した人なら、その能力を疑う者はいなかった。しかし、博士は、教師としてより批評家としての気概を持っていた。科学的事実をどこまでも追究する点で、限らない辛抱強さを持ち合わせていたが、人間の本性に辛抱できないのも、その点だけは同じく限りなしだった。博士の講義は往々にして、不完全なデータに基づく理論を発表した著名人への痛罵へと逸れてしまった。

指導者の任にふさわしくないと、博士自身もわかっていたのかもしれない。もちろん、ふざわしくないと博士にほめかした者はいない。それはともかく、博士は職を投げうち、父親から相続したウエストボーン・テラスの邸宅に隠遁してしまった。博士の収入は、悠悠自適の生活を送つてもあり余るほどだった。長年にわたり、博士は科学分野の批評にその才能を費やしてきた。比較的限られた科学畑の人々のあいだではあつたが、博士は指導的な権威と見られていた。

大戦が勃発して間もなく、クラヴァートンは思いがけず、かなりの財産を相続した。幼い頃も含めて減多に会つたことのないところが、一九一四年九月の初めに一人息子を亡くしたのだ。彼女は新たに遺言書を作成し、全財産をクラヴァートンに遺すことにした。ほどなくして、彼女はポーマリス・プレイスの自宅で亡くなった。

その頃、クラヴァートンはイングランド北部で政府の仕事に就き、企画力を存分に発揮していた。相続した家には住まず、戦時中は寄宿寮として使わせていた。休戦協定が結ばれると、業績を認められ、いまや大英帝国二等勲爵士となったジョン・クラヴァートン卿は、ロンドンに根を下ろすことに決めた。ポーマリス・プレイス十三番地の家は彼の趣味に合わせて改装され、しばらくすると、そこに引越してきた。

彼はずっと独身で、口癖のように言っていた。他人の家族に会うたびに、自分は家族を持たなくてよかったと思う、と。人付き合いもさほどせず、ロンドンに住むようになってから、ことさらにごく少数の旧友としか会おうとしなかった。プリーストリー博士もそんな友人の一人だ。彼らは不規則に会うだけだったし、ついつい疎遠になりがちだった。実際、博士はその秋の日の朝、友人から手紙が届かなかつたら、午後の研究を中断したりはしなかっただろう。

実にそっけない短信程度の手紙。少々体調がすぐれず、家に引きこもっているので、プリーストリー博士にお越しいただければ、という簡潔な内容。ただそれだけで、日時すら触れていない。博士は、ご無沙汰を埋め合わせたい気持ちもあり、その日、クラヴァートンを訪ねることにした。

ポーマリス・プレイスは、ヴィクトリア朝時代から幾度も変化を重ねてきたが、その時代には流行の最前線にあった場所、つまり、家屋周旋業者がよく言う、快適な居住空間だったのだ。大きく、いかめしい感じの家々には、当時、裕福な都会人が住み、活きのいい二頭立て馬車で日々職場に通勤していた。だが、近代的な交通手段が発達したおかげで距離感が縮まると、ポーマリス・プレイスの住人たちは、「田園」と自慢げに呼ぶ郊外へと移転し、家並みの窓には次々と「貸家」という末期症的表示が出はじめた。

残ったのは十三番地の家だけ。クラヴァートンのいとこが嫁いだ先の家族が頑固一徹で、住み慣れた家を捨てられなかったのだ。界限が寂れていくのをものともせず、このいとこは、夫の死後も古い家で一人暮らしを続けた。彼女は、その家で死にたいとよく漏らしていた。その願いは思ったよりずっと早く実現してしまった。息子が相続後に家を売るなら、それは息子の勝手。だが、内心、売ってほしくないと思っていた。

息子が亡くなって将来展望が音を立てて崩れたとき、心にかけるのは家だけになった。家は彼女の人生の一部になっていた。嫁いだ日以来、その家が彼女の喜びと悲しみを温かい目で静かに見守ってきてくれたように思えた。生きがいを失ってしまうと、死神が容赦なく、それも優しげに手招きしてくる。お迎えを受け入れる覚悟はできていたが、無神経な下宿人が入れ替わり立ち替わり入って、愛着のある部屋を占領するのは想像するのも耐え難かった。

クラヴァートン家の一員である彼女が、ジョン・クラヴァートンのことを思い出したのはまさにそのとき。全然知らない相手。たまに会う家族の友人たちを通じて、時おり伝え聞くだけ。だが、クラヴァートン家の一族が、夫の家族と同じ保守的な気質があることは知っていた。クラヴァートン家の者に委ねれば、十三番地の家は安泰だ、と考えたのかも。ともあれ、彼女は新たな遺言書を作成し、家を他の財産とともに、いとこのジョンに遺したのだ。

彼女はジョンに何の希望も伝えなかった。それどころか、相続人に定めたことすら知らせようとは思わなかった。彼女の葬儀の日まで、ジョン・クラヴァートンは十三番地の家を見たこともなかった。だが、彼女の直感は間違っていない。彼はその日以来、すべてが片付いたら、その家に住もうと決めたのだ。

おかしな判断をしたものだと思う者も多かっただろう。すでに変化は急速に進んでいた。偶数番号の番地が振られた通りの東側は、陰気で威圧的な建物の並びもほとんど姿を消していた。一軒、また一軒と、快適なる住宅が家屋解体業者に委ねられた結果、なじみのない建造物とその跡地に建っていた。ある場所には、さほど快適でもないフラットが建ち、別の場所には映画館があるが、入口はもう一つ隣の通り側にあるため、こちら側は工場のような外壁がむき出しになっている。

ジョン・クラヴァートンはそんなありさまを見ても、肩をすくめたただけだ。通りの外観が損なわれようと、彼にはどうでもよかった。仮に外観のことを考えたとしても、どのみち人は家の中に住むのであり、外に住むわけではないと考えただろう。

十三番地の家に住んでからも、変化が急速に進もうと気にも留めなかった。残っていた偶数番地の家も、戦後一、二年のうちですべて姿を消した。さらに、奇数番地の家も、投機的な建築業者の猛攻の前に次々と陥落しはじめた。一番地から七番地の家は、ほぼ一夜にして消え、跡地には大きな自動車修理工場ができた。九番地から十一番地の家は倉庫に改築され、外には大きなバンが毎日何台も停まる。あとは、十三番地から二十七番地の家、つまり、ボーマリス・プレイスの末端に位置する角地の家が残るだけ。

以上が、プリーストリー博士が前に友人を訪ねたときのありさまだ。だがこの日、博士が修理工場のある角を曲がり、通りに入ると、以前にもまして開発の進んだ様子が目に入った。十三番地の先には、建築現場の板囲いが見えるだけで、中からは慌ただしい建築作業の音が聞こえてくる。十五番地から二十七番地の家はすでに跡形もない。

博士は、その光景に軽いショックを覚えた。そこにあった家の住人たちは、何の痕跡も残さず消えてしまったのか？ 砂漠の中のオアシスの如き十三番地の家も、いつまで残り続けるだろうか？ その家もついに壊されたら、ジョン・クラヴァートンの個性は何が残るのか？ もちろん、自分も迂闊だった。ほかのことにまぎれ、友人と疎遠になっていたのだ。これからは、こまめに訪ねることにしよう。帰ったら、カレンダーに印をつけるさ。せめて月に一度は。たとえば、毎月第四水曜とか。博士は、十三番地の家が目の前から消えてしまうのではと恐れるみたいに歩を早めた。

執事がドアを開けてくれた。いかめしい顔つきの初老の男で、来客が誰かわかると、おじぎをした。黙ってプリーストリー博士の帽子とコートを受け取り、まるで祭壇に犠牲を献げるみたいに、玄関ホールテーブルに恭しく置いた。まだ四時になったばかりだが、玄関ホールにはや黄昏が訪れたように薄暗く、周囲もぼんやりと見分けられるだけ。それでも、博士は、テーブルにあるのが自分の帽子だけではないと気づいた。

客は自分だけではなさそうだと思うと、そわそわしはじめた。クラヴァートンに会って三十分ほど話をしようと思って、急ぎの仕事も中断してきたのだ。ほかにも客がいるとは予想もしなかった。この家でほかの客に出くわすことなどなかったのに。予定していた水入らずの会話が、とりとめもない散漫なおしゃべりに墮してしまうのは我慢ならない。「ジョン卿に誰かお客かい、フォークナー？」と博士は強い口調で尋ねた。

「ジョン卿は図書室にお一人です」と執事は答え、厚い絨毯敷きの階段を上がった。博士はあとに続いた。家の間取りはよく知っている。一階には食堂と居間があり、二階には客間と図書室。クラヴァートンが博士を迎えるのは、いつも図書室だ。ところが、驚いたことに、フォークナーは、踊り場に来ると、客間のドアに向かった。ノブに手を触れる前に、ちよつとためらう様子を見せた。ドアを開けると、客人を中に入れるために脇に寄り、「プリーストリー博士でございます！」と告げた。

部屋は窓に厚いカーテンが引かれ、玄関ホールよりわずかに明るいだけ。博士が中に入っても、出迎えたのは深い静寂で、いるのは自分だけだと思つた。フォークナーは主人に来客を告げに行くのに、とりあえず自分をここに案内しただけだ。だが、なぜあんなふうにかしこまって来訪を告げ

たののか？

部屋の片隅のソファのほうから、かすかな衣擦れの音がして、博士はハッとしたり。素早く目を向けると、暗さに慣れてきたこともあり、年配の婦人の姿に気づいた。彼女は頭をかがめ、何か手の込んだ編み物に勤しんでいる。精巧な機械のように規則正しいリズムで指を動かしていたが、博士がいることにまるで気づいていない様子。

博士は、静かな部屋に人がほかにもいるのに気づいた。火のない暖炉のそばに、娘が膝に本を載せて椅子に座り、そばのカーペットにたばこの灰をまき散らしていた。博士は、彼女がこつちを見て、かすかにおじぎしたのに気づいた。むつつりと敵意に満ちた表情はまったく変わらない。博士がおじぎをすると、身なりのいい青年が挨拶を返した。彼はそれまで、娘が座る椅子の後ろから無頓着に身を乗り出していたのだ。

プリーストリー博士には、その連中が誰か見当もつかなかった。過去を偲ぶ最後の砦である十三番地の家が、いつの間にか見知らぬ敵に侵入されてしまったかのようだ。まるで、見つからぬように言葉を発しないと誓約を立てた人たち。博士は、彼らの秘密の場所に闖入してしまった気がした。娘と視線がぶつかった瞬間から、自分は招かれざる客だと気づいた。沈黙は一、二秒ほど続いただけだが、そのあいだに、博士は、得体の知れない未知の人々の印象を素早くまとめ上げた。グレーの服の女は、ソファに座ったまま規則正しく編み物をし、決して頭を上げない。青年のほうは、今は体をまっすぐ起し、石から切り出された像のように固く身じろぎもしない。そして、娘は、謎めいた目で問いかけるように博士を見つめていたが、博士がいることに腹を立てているのが目にはつきりと表れていた。

沈黙を破ったのは娘だ。唐突で、驚くほど敏捷な動作だった。今まで座っていたはずが、次の刹那

尊敬語で語りかけられるのには慣れていた。だが、この青年の口から出た尊敬語には、敬意よりも挑戦の響きが感じられたのだ。

プリーストリー博士ほど世慣れぬ者なら、こんな冷淡な迎え方をされれば、居心地悪く感じたかもしれない。だが、博士は、これまでも奇妙な状況にはいろいろ出くわしてきたので、この程度の居心地悪さも今さら気に留めなかった。まごつきはしなかったが、腹は立った。クラヴァートンには、私をこんな場所に案内してほしくなかったな。家にこういう連中がいるなら、手紙に書いてくれたらよかつたものを。それに、フォークナーだって、こんな部屋に案内するものじゃない。たとえば、居間でお待ちくださいとも言えたはずだ。もっとも、得体の知れぬ連中が居間にもいるというなら話は別だが。博士は、あと五分以内にクラヴァートンのところに案内されなかつたら、一階に降りてコートと帽子を取り上げ、家を立ち去ろうと決めた。

博士はそのあいだも、観察の習慣に従って、同室の人々の情報をかき集めていた。グレーの服の女は、ひたすら編み物に編み針を通すばかりで、博士を無視している。女の姿で目に入るものは、ほっそりと痩せた体と、その身にまとったグレーのドレス、かすかに艶を帯びた鉄灰色の髪、せわしく動くか細い指だけ。作業中の黒い編み物は、棺覆いのように膝の上に広げられ、厚い襪になって床に垂れていた。それが結局何に使われるものか、博士にはさっぱりわからなかった。まるで催眠術で自意識を失ったかのように、単調に動く指以外に微動だにしない女の姿は、編み針を操る仕掛けを内蔵した蠟人形のようなのだ。

青年のほうは、自分の挨拶に博士が示した反応に気後れしたらしく、窓のほうに歩み寄り、向かいのフラットをぼんやりと見つめた。光の加減のせいで顔が窓に映っていたため、博士はその顔をじっ

と観察した。見たかぎり、二十代前半のようだ。顔つきは端整で、際立った顎が意志の強さを表している。顔はハンサムだが、博士の見るところ、ユーモアのかけらも感じられないのが玉に瑕。ユーモアのセンスもない男は世の中で成功しないというのが、博士の持論だったのだ。

青年は眉根に深く皺を寄せ、表情を曇らせていた。何か悩みがあるな、と博士は思った。彼は確か、来客を告げられたとき、娘の椅子の背後から身を乗り出していた。愛想の悪い対応をしたのも、そのせいか？ 内密の話をしていたのでは。どう見ても二人だけで話をしていて、グレーの服の女の存在は、内緒話の妨げにはなりそうにないからだ。この女なら、目の前で二人が窓から飛び降りたとしてもまったく気に留めまい、と博士は思った。

だが、それほど深刻な悩み事に比べれば、自分が束の間闖入したことなど、たいした話でもあるまい！ 娘はクラヴァートンに來客を告げに行っただけだし、数分もすれば、自分もここから厄介払いというわけだ。この連中の態度についても、きつともっとまじな説明をしてもらえないのでは？ この家には何か謎めいた秘密があるぞ、と博士が判断したとき、ドアが開いて娘が姿を見せた。

「ジョン伯父さまがお会いになるそうです」と娘は唐突に言った。「図書室におられるわ。場所はご存じですね？」

こうして、彼女はプリーストリー博士のことを意識から追い払ったらしく、博士に背を向けて窓際の青年のところに行った。

## 第二章

プリーストリー博士は、表向きは娘の不躰さを気に留めていないようだった。客間を出ると、音を立てないようにそつとドアを閉めた。だが、踊り場まで来て、一瞬立ち止まると、あんなおかしな対応をされたことで、この家を立ち去りたい気持ちになっていた。

だが、クラヴァートンが図書室で待っていると考えて思い留まった。ともあれ、あんな扱いを受けたからといって、クラヴァートンのせいではない。それに、クラヴァートンと話せば、あの変な連中とその態度のことも何かわかるのではと思ったことも、博士の判断を後押しした。

図書室のドアを開け、中に入った。そこは、十三番地の薄暗い屋内にどうにか入り込んでいた日差しの名残も完全に遮断されていた。天井から床まで重苦しく垂れた、厚手の黒いカーテンが引かれていたのだ。だが、人工照明の光では、窓から入る日差しのためにはならない。読書用ランプが一つだけ、部屋の隅のテーブルに置かれ、そばの椅子に座る男を照らしていた。部屋のほかの部分はずっと暗だ。

博士が入ってくると、ジョン・クラヴァートン卿はもの憂げに目を上げた。背が高く、ほっそりしていたが、意志の強そうな顔は髭をきれいにあたってあり、濃い眉の下には深く窪んだ目があった。だが、博士は、相手に歩み寄りながら、嫌な疑問が頭に浮かんだ。自分もこんなに老けて見えるの

〔著者〕

ジョン・ロード

1884年生まれ。本名セシル・ジョン・チャールズ・ストリート。別名義にマイルズ・パートン、セシル・ウェイ。元陸軍少佐だが、詳しい略歴は不明。1924年、“A.S.F.”(1924)でミステリ作家としてデビュー。25年に発表した“The Paddington Mystery”以降、ミステリ作品を多数発表し、ディテクション・クラブの主要メンバーとしても活躍した。1964年死去。

〔訳者〕

淵上瘦平（ふちがみ・そうへい）

英米文学翻訳家。海外ミステリ研究家。訳書にジョン・ロード『代診医の死』（論創社）、R・オースティン・フリーマン『キャッツ・アイ』（筑摩書房）など。

クラヴァートンの<sup>なぜ</sup>謎

——論創海外ミステリ 228

---

2019年2月20日 初版第1刷印刷

2019年2月28日 初版第1刷発行

著者 ジョン・ロード

訳者 淵上瘦平

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1790-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします